

真宗大谷派高岡教区教化通信

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 教如士人四百回忌法要

テーマ「仏さまの願いあってこそ ここまでいのち そしてこれからの命」



2015年 城端別院 御遠忌法要

題字：常如版の御文

卷之三

2021年6月1日

我身

WAGAMI

「民藝運動に学ぶこと」

城端別院善德寺輪番

龜潤

卓

一九四八（昭和二十三）年六月時分、民藝運動の柳宗悦は城端別院にいた。十五年戦争の敗戦から三年、日本の社会もほんの少し落ち着きを見せてきたころ、静かな環境の中でそれまでの民藝運動の思想となってきた美的思索を大成させるものを見かにしておこうと思い立つたのだという。それまでの縁を頼りに紹介された城端別院に逗留することとなつた八月初旬のある日、引き寄せられるように本堂に積まれてあつた『大無量寿經』を手に取り、説かれている言説を追つていたそして第四願に至つた時、「何か欣然として結氷の解けゆく想ひ」がしたというのだ。本願文の第四願とは、「無有好醜の願」という。「たとい我仏を得んに國の中の人天形色不同にして好醜あらば正覺を取らじ」、淨土に美と醜との対立がもしあつたら、仏とはならない、という法藏菩薩の願である。対立するということは、どちらかが優位に立ち、どちらかが振り返られることもない立場に追い込まれることである。もちろん、世を超えて褒めたたえられる普遍的美を備えている美術品はある。しかし、名も知られることのない陶工の、それこそ日常茶飯に使われている、欠ければ簡単に打ち捨てられていく、そんな器や道具は、私たちの身の回りには掃いて捨てるほどある。そんなものたちに底知れぬ美と価値を見出したのが柳らの民藝運動であつた。結局普段運筆な柳が一夜にして書き上げた

『美の法門』を得るまで、彼は別院の「お広敷の間」におよそ七十日間を起居した。さて、私たちは一九九八（平成十）年に蓮如上人五百回御遠忌法要をお迎えした。この御遠忌法要の際のテーマは、「バラバラでいつしょー差異（ちがい）」を認める世界の発見」というものであった。一人一人違うことが多様な豊かさを生み出してきたし、その多様性のなかに一人一人が生き生きと「いのち」を生ききつてほしい、そんな願いが託されてあつたテーマではないかと思う。一人一人はみんな違う個性を持つており、その個性を消し去つて同化させていくところに「いつしょー」の世界があるのではない。むしろその個性こそが、私たちに大きな世界を開かせてくるのだ。姿・格好を同質化させ、大きな力をもつて同一の言語や文化の前に人々をひれ伏せさせていくところには、豊かさや繁栄やにぎわい、また平等、独立ということは生まれてこない。柳が民藝運動で追い求めたものは、どんなものにも美しいというものは潜んでいるし、むしろそれを見出すことが出来ない私たちの意識構造にこそ問題があるのではないか、ということではなかつたか。それは本願が、第四願という形をとつて、如来の金言が私たちに迫つてくるのだ。柳はそれに目を見開かされただけだ。そしてそれは、念佛の教えを聞き続けていく私たちにも同様に迫つてくる。「バラバラでいつしょー」という言葉で。

高岡教区教化委員会

一〇一八年三月一日 於 高岡教務所

第二回

同朋会運動の願いに学ぶ

講師 東京教区淨安寺衆徒
元 同朋会館補導主任 木名瀬 勝 氏

かつて高岡教区では、お寺といつよりも地域を中心に、お講が盛んに営まれていたと聞いております。しかし、現在そのお講も、衰退の一途をたどっているとしても過言ではありません。私たちにとって大事で身近な聞法の場が失われつつあるのです。今こそ僧俗が協力しあって聞法の場を開いていくこと、またその担い手が誕生することが願われています。

そこで、今年度の同朋の会推進部門では、同朋会運動の願いや目的を学ぶことを通して、課題を確かめ、私たちの新たな一步となることを願つて、下記のとおり、学習会を開催いたします。

(開催趣旨より抜粋)

「」んにちは。前回五月三十一日、「」ちらに伺いまして、その時に、先ほどお話をありましたように、同朋会運動についてお話ししました。私はそれ一回限りだと思つていましたので、自分の思いをすべて話しました。というのは、五月三十一日の時は、私は名古屋教区から職員として参ったわけなんですけれども、実は二日後の六月一日に退職願を提出しました。十五年勤めた大谷派宗務所職員を辞めて、その後、田舎に帰ることになっていたからです。ですので、今日は茨城県の水戸の方から、朝、参りました。そういう経緯はありましたが、今振り返つても、私は同朋会運動の中で育てられたというふうに思っています。

■同朋会運動に育てられた十五年

このよつたな開催趣旨のもと、木名瀬勝氏にお話しいただきました。今回も全二回のうち、第一回の講義全文を掲載いたします。なお、第二回の内容につきましては、『我身』第七号で掲載する予定です。

「」そりで、「育てられた」という時に、「何に」ということがある。それは、一言で言つてしまえば、阿弥陀さまになつてしまふんです。阿弥陀さまというのは具体的に、私た



講師 木名瀬 勝 氏

ではわからなかつたのですが、同朋会運動にどっぷりと浸かっていた。その後、教団組織を離れての生活。八月に退職しまして、半年くらい経つ今的生活ということです。

今の生活は、このように研修会や法要に呼ばれてお話をしていますけれども、週三日ほど友人が経営する会計事務所で働いています。税務の実務は何も知りませんから、嘱託職員として、顧客管理とか書類整理や労務管理をしています。みなさん（門徒さん）と同じように、普段はお寺に関わらない仕事をしている。

そういう自分の人生を振り返った時に、以前と今の生活はどこが変わったか、と言いますと、形としては、自宅にお内仏があつて、毎日手を合わせる。これなんですね。みなさんは、お内仏に手を合わせるなんて当たり前だらうと思うかもしれませんが、私にとっては、毎日手を合わせるようになつた。そして口に「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と称えている。職場でそして十五年間の宗務所職員の生活。自分

「あつ」と口を押さえてしまつたりします。「何、ぶつぶつ言つていいの」と訊かれますからね。「南無阿弥陀仏と称えているんです」と答えたたら変な人と思われてしまうなど。法衣を着ている時は気にしなかつたのですが、はばかってしまふことも考えさせられます。

これは意識して、こういう生活をしようと思ったわけではありません。いつの間にか身についていた。称名とお内仏、要するにご本尊のある生活です。自宅に手を合わせる場所がある。つまり、手を合わせて南無阿弥陀仏と声を出せる身に育てられた。私の人生にご本尊が与えられたということがです。

そして、時代と社会に対する「問い合わせ」ですね。以前の私でしたら、「今日も仕事疲れたら」とため息をついて、仕事に追われる毎日の繰り返しの中で、自分が何者かわからずに「退屈だ、空しいな」と嘆いていました。そんな自分が、今は「なぜこんなにも生きづらい世の中なんだろう」、「現代

社会の問題はどんな歴史をたどって起つてきているのか」とか、「日本人は、そして私は何を求めて生きているんだろう」と問うわけですね。根本には「人間って何なのだ」という問い合わせがあるんですが、問うことは、隸属からの解放ではないかと思います。

■倉本聰

（五〇歳からの新たな道）

私は普段新聞を読まないんすけれども、たまたま十二月頃の新聞の広告に、倉本聰という方の文章に出会いました。皆さんご存知ですね。倉本聰さんが、自分は若い時に、本当にやりたいことに一旦蓋をして、将来取り出すまでしまっておいて、実力をつけてから、その大切にしていたやりたいことを取り出して、人生を出発しようということを考えたと。ところが、ほとんど人は、蓋をしたことさえも忘れて生きてしまっていると。四十歳、五十歳になつた

ら、それを取り出すんすといふことが書いてありました。

この文章を読んで、というより、文章の方が私に飛び込んできただんですが、「そういうことだよね」と大きくうなずきました。私は五十一歳ですが、五十歳になろうという頃から、十代の思春期に、二十代の青春時代に、私が本当に求めていたものは何だつたのだろう。どうして自分は仏教を学びたかったのか。そういう記憶をもう一度取り戻そう、確認してみようと思い始めていたんです。なぜかと言いますと、いつの間にか経験や知識を積んで、自分のことも世界のことなんとかわかつたような気になつていてるんです。ところが、それが本当に自分が求めていたことなんだろうか。求めていたことは本当にもう解決したんだろうかと。それで、たまたま親の体調が悪くなつたことをきっかけに田舎に帰つて、もう一度五十歳からの新たな道が始まつたんです。そういうことを倉本聰さんが認めてくれたように感じました。

五十歳と言つても、私の友人はみんな若いつもです。二日前にちょうど高校の同窓会がありました。糖尿や痛風なんかの病気の話ばかりしているのに、若いつもりなんです。私は「もう初老だよ。それを認めようよ」と言つたんです。そうしたら嫌な顔していました。「初老なんだから、今までみたいに右肩上がりで仕事やるぞ」というよりも、もつと落ちついて、もう一度これから自分の生き様というものを見つくりと腰を据えて考える歳だらうな」というふうに隣りの友人と話をしました。「初老だよ。人生の新しい時期に入ったんだ」ということです。

何が言いたいのかということですけれども、初心は何なのかです。私にとって、仏法に出遇わせた初心とは何かということを、もう一度確かめるということを、ちょうど広告の文章で再認識したわけです。新聞は捨ててしまつたので、今日の講義のために、インターネットで倉本さんのその文章を探しましたら、中日新聞ホームページに載つ

ていました。

未来は暗いですよ。真っ暗じゃないですか。若い人たちを見ていると、物質的な贈与は受けていると思います。でも、精神的な贈与は受けていません。贈られているのに、ちゃんと受け取っていないと強く感じます。僕はそれをやろうとして富良野塾を二十六年間やつたんだけど、年を追うごとに吸收、インプットができる若者が増えました。

そのあとは、文章が長いのでここには引用しませんでしたが、ではどうすればいいのか。倉本聰さんの解決策は徴兵制ならぬ「徴農制」と言っているんです。つまり、みんな農作業を経験しようとついているんですね。倉本さんは人を見る時に、手の指の爪を見るんだそうです。それで「爪の中は黒くあるべきです。土に触れていれば」と。

そして「大地に帰れ」と言います。

私はそのとおりだと思いました。自分も

まつたく土に触れずに、鉄筋コンクリート

の中、あるいはインターネットという情報の中で生きている。大地を離れてしまって

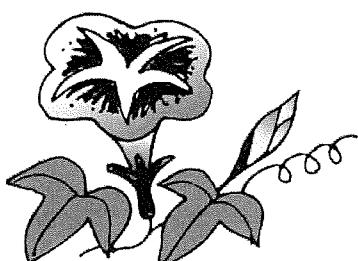
いる。それではだめだよなというふうに思っていた時期もあります。でも、もし、

私たちの身近な若い人たちに、あなたたちは精神的な贈与、吸收・インプットができる精神的な贈与、「農作業をしろ」というのが解決策でしたら、私たちが真宗を学ぶといふことつながつてこないんです。真宗でも大地という言葉を大事にします。淨土、

本願を大地にたとえたりしますけれども、私は徴兵制ならぬ徴農制という具体的な体験がなくとも、聞法することによって大地に触れていく、大地に帰っていく教えこそ淨土真宗だと思っています。それがはつきりしなければ、現代において淨土真宗を聞いてもらえるだろうか。あるいは、私たち自身にとつてもそうです。この教えを聞く

土真宗なんだ。だから私たちは教えを聞くんだということが、自分の中ではつきりでわかるかということが、大切かなと思っていきます。

それで、大地の話はまたお話ししますけれども、倉本さんの言う、この精神的な贈与というものを、私たちはすでに贈られているんですけども、それが受け取れないとはどういうことか。これは要するに、受け取る側の問題、つまり感受性の問題でしよう。



内田樹

／靈的感覺性が鈍磨している／

倉本さんの文章を読んだのと同じ時期に、内田樹という方の存在を知りました。内田さんは、とりあえずは社会学者ですが、合氣道七段で合氣道の道場を持つていて、『修行論』というおもしろい本も書いています。

それで、学習会資料に引用しました『日本の覺醒のために』内田樹講演集という本は、たまたま本屋さんでパッと手に取つたんです。「あ、内田樹さんの本があつた。買おう」と。そうしたら「これから時代に僧侶やお寺が担うべき役割とは」という講演録が載っていたんです。「これはちょうどいいわ」。おもしろいと思いませんか。これも感受性というものでしょ。探していくわけではなく、パッと手に取るという具合に、私がちょうど求めていたものが向こうから飛び込んでくる。この講演録は、どこの宗派の僧侶が企画した講演会でしょ。そこに、

宗教者にとって大切な仕事の一つは「靈的センターである場を守る」

とあります。「靈的」というと、現代では、いろいろな先入観があるので、なんだかオカルトのような怪しい言葉に聞こえてしまふんですけども、それも一つの時代的な言葉のゆがみです。でも、この「靈的」と

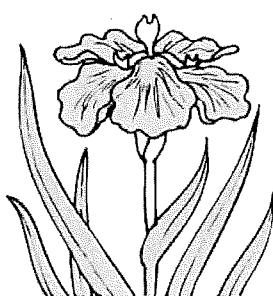
いう言葉を真宗の学びの中で、きちんと考えていくことは大切だと思っていきます。靈魂やオカルトとどう違うのか。教化においても非常に大事な問題なんですね。とにかく、靈的センターである場を守るとことかく、これがお寺を守るということだと言つています。そして、

今日本人に一番欠如しているものはそれです。靈的感覺性が鈍麻している。靈的に淨化された空間に踏み込んだときに、ここは世俗とは別の場だということさえ感知できない。

(中略) ですから、道場には、神棚

であつても、仏壇であつても十字架であつても、とにかく、「超越的なものとの回路」が存在する必要がある。(中略) 現代日本人の宗教的感受性、靈的感覺性を賦活し再生させることなどが、現在の宗教人の全員にとって喫緊の課題だと思います。

ここまで言い切つているんです。「賦活」というのは、衰えているものをもう一回活性化することです。鈍くなっているものをもう一度元気にして、生き生きと動き出すようにすることです。そのことを、倉本さんは、若者が今、吸収・インプットができない、精神的な贈与を受けているのに受け取れないというわけでしょう。



それは私自身の場合も、十代から三十代を考えた時に、同じだったのです。寺も神社もない新興の住宅街で育ち、仏教を求め学びながらも「超越的なものとの回路」は存在せず、手を合わせるということがなかった。中学校の時に、修学旅行で奈良や京都のお寺に行つた以外は、二十八歳になるまでお寺に参るなんてことはありませんでした。ましてや、僧侶と話をする機会なんてなかつた。そういう出遇いの場もないという状況もありますけれども、現代のコンクリートと、そして情報の海の中で、靈的なものを感受する力を失つて鈍くなっている。要するに、病気になつているといふことです。ですから、私たちは時代、社会的状況によつて苦しんでいるといふことがあります。そういう環境の中に閉じ込められて、身動きが取れないままもがいていた。現代の若者も、私と同じように、贈与、プレゼント、精神的な生きる力、そういう存在に気づけない。

高校を卒業してから私と同じような悩みを持つたんです。悩みとは何かといふと、

■世界の果てまで旅して見つけたものは?

ところで、靈的感應性ということで思い出す友人がいるんです。これは私自身のこれまでの生き方とも重なるんですが、その友人の生き方が、まるで物語のようにとてもわかりやすいので紹介します。彼女は高校時代の同級生なんですが、現在、東京都市内の大学で准教授をしています。たまに「こ

と私は思っています。

彼女はまず英語を勉強してアメリカの大学に留学した。ところが、「ここが本当に自分が生き生きと生きられる場所ではない、何か違う」と感じて、今度はアラビア語を勉強して、どこに行つたかといふと、シリアに行きました。日本領事館にアルバイトで勤めたそうですが、その当時はキリスト教徒もイスラム教徒もユダヤ教徒も、みんな隣同士仲良く生活していたそうです。まだ、ソビエトという国があつた頃ですから、二十数年前ですか。シリアに来たけれども、もっと本当の居場所があるはずだと

「私って何だろう」です。そして自分の居場所がないことです。「私は何者なんだろう」「何のために生まれてきたんだろう」と思つたら、今自分がいる場所に落ち着けないわけです。そこで、自分が生き生きと生きができる場所が見つかれば解決するのではないか。では、いつたいどこにあるのだろうということで、居場所を探す旅に出る時が、青春のはじまりではないかと私は思っています。

いうことで、さらに世界の果てまで行こうと思つて、どうしたか。領事館で同僚だった人がグルジアの出身だと。グルジアというのはソチオリンピックで有名になつたところですが、今はジョージアという国名になつています。「あなたの故郷まで連れて行つて」ということになつて、黒海を渡つて、ソチに入つて、そこからまた電車とか車を乗り継いでいくわけです。ソ連時代ですから、共産党员の監視が付いていたそうです。

なつている。そして、年寄りたちが鍬で小さな畑を耕していた。そういう光景がパッと目に入った時に、彼女は「私が子どもの頃に行つた、おばあちゃんち、田舎の風景と同じだ」と。本当に自分が生き生きと生きられる、自分の本当の居場所はどこだろうと、世界の果てまで来たと思つたら、子ども時代に見慣れた、おばあちゃんの住む村と同じだつた。その瞬間、彼女は日本に帰ろうと思つたそうです。

それで、日本に帰つてきて何をしたかと言ひますと、今彼女が専攻しているのは「人体科学」という分野です。人体科学学会の企画委員をやつていて、「今度、学会で内田樹先生が講演するけど、来ないか」と誘われたので、内田樹という人を知つたんです。(※講演当日に、以前読んだ『日本辺境論』の著者であることを思い出しました。) ところがおもしろいことに、「科学」と付いてる学会なのに、「自我」とか「我執」という言葉が講演中に出てくるんです。そこには、石造りの家がポツリポツリとあつて、ヤギとかニワトリが放し飼いに

けないと思い込んでいたので、学者の人たちも、こういう言葉を使つてゐるんだと驚きました。

■「法器」を大切にお過ぎしください

そういうわけで、彼女がテーマにしているのは「身体」なんです。世界の果てまで行つて、自分の身体に戻つてきたんです。私は、これこそ自分がずっと仏教に関わつて、「仏さまとは何だろう。お淨土とは、念佛とは何だ。真宗とはどういう学び方をするべきいいんだろう」とか、そういうふうにやつてきたものと同じだと思いました。

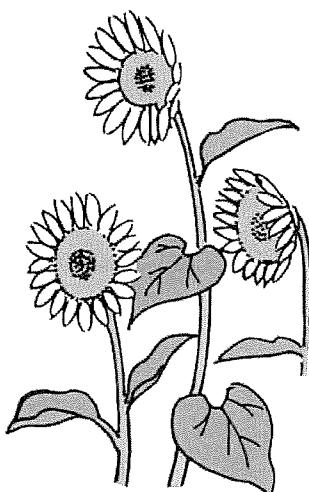
つまり私は「仏さまはどこにいるのか。眞実はどこにあるんだ」と、眞実ということを対象化してはならないと知りながらも、物を探すように、なんとなく外に求めていたんです。それを気づかされた言葉に出来ましたのが、あるご住職からの暑中見舞いのハガキだつたんです。「暑中お見舞い申し上げます」からはじまつて、最後

に「お体を大切にお過ごしください」というのが常套句ですね。ところが、その部分には、こう書かれてあつたんです。

ご法器をお大切にお過ごしください。

お体を大切に、と言うところを、ご法器を大切にと。法の器。私はこれをテープルに立てかけて、「ご法器を大切に」とはどういうことだらうと毎日眺めています。先ほどの同級生が、本当のこと求め世界の果てまで行って、最後に、自分の身体に帰ってきたということ重なるのです。私たちは、真実はどこだ、仏さまはどこだと探し回って、ここだつたということです。この身を離れて、どこにも教えはありません。仏さまもいません。この身が教えて、この身に法がはたらいている。そういうことにうなづけたんです。

ですから、法の器である、この身体を活性化させる。なんで活性化していないか。それは頭がでかくなってしまったからで



しょう。全部頭で考えています。観念ですね。だから、頭と身体が分裂してしまっていて、身体はどちらかというと厄介者です。とりあえず、「壊れないように健康を保つて、運動をしようか」というくらいのもんです。頭が優先で、「頭を使うために、何とか健康でいよう」とか。「いつまでも旅行できるように、足腰を鍛えよう」とかね。おいしいものが食べられたり、少しでも楽しく生きられるようにするための道具、頭を活かすための道具になつているんです。たとえると、頭が主人で、判断し命令する。身体は命令を聞いてくれない使用人です。鈍麻している感受性ということは、それを言つているんじゃないでしょうか。

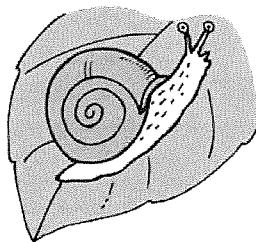
■ 「私」ではなく「身」で考える

ですから、彼女が身体に帰ってきて、身体をもう一度活性化させようと、身体に秘密があることに気がついたように、真宗を学ぶときに、「身」という言葉を大事にすることが必要ではないかと思います。『歎異抄』を読んでいても、たくさん出てきますね。「そくばくの業をもちける身」とか「身の罪惡のふかきほど」（聖典六四〇頁）というように、「私」ではなく「身」と親鸞聖人はおっしゃいます。身で考へているということですね。私たちは頭でつかちで、頭で世界を作つているんでしょうね。世間の知恵と知識と経験、今は何でも情報が手に入りますから、その場ですぐに調べられる。それで世界の裏側までわかつたつもりになります。頭にすべて詰まつていて、それが私のすべてだと思つていて。ところが実は、この身体こそ、生命の秘密も歴史も、仏さまとは何か、真実とは何かも、この身体にある、隠されている、詰まつていると

いうことです。ですから、頭の枠を取つ払つて身体全体で考える。それを靈的感性と言つてゐるんでしょう。私たちは外ばかりを見ていて、実は自分の身を知らない。厄介なものにしか思えないということです。う。

人身受け難し、今までに受く。
仏法聞き難し、今までに聞く。

という三帰依文の冒頭は、受け取り難い自分の身を受けることと、聞き難い仏法を聞くということが同時だというわけですね。そうしますと、わが身を主体として発見したということかと思ひます。わが身が法の器であることを發見したということです。



■真宗門徒は、

「背いでいる我」を生きる

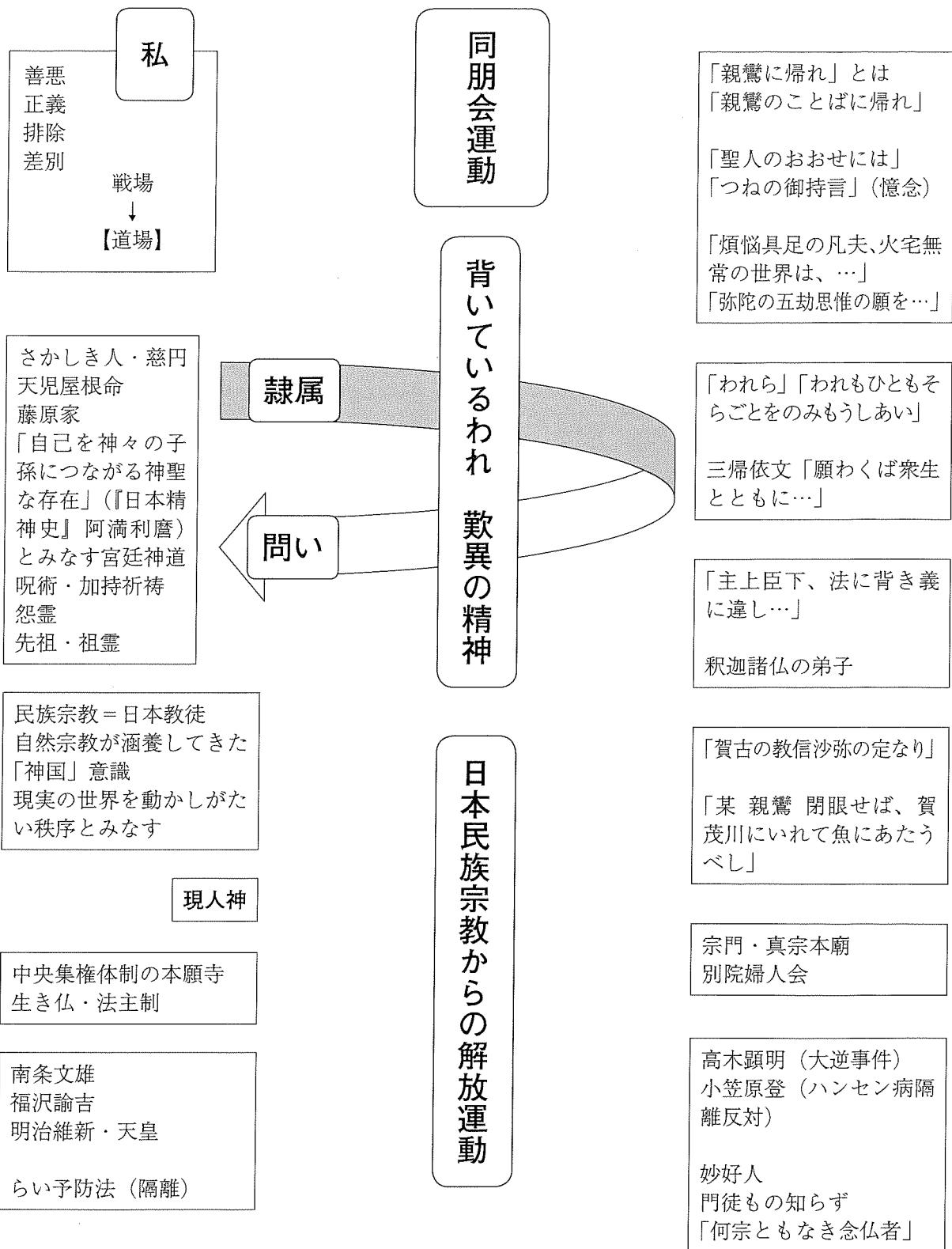
ここまで、最近数カ月考えておりますことで、前置きのはずだつたんですが長くなつてしましました。資料(十一頁に記載)は昨日慌てて作つたんですけども、見ればわかるとおり、お前は混乱しているなど思われるかもしれません。私にとっての同朋会運動ということを整理するために作つたんですけども、このカーブしている矢印がどういうことかだけ、イメージとして理解していただければと思います。

これは単純に括れないんですけども、左側は私たちの現実社会です。自分が現実だと思つてゐる世界と言つてもいいです。右側は、阿弥陀さまの具体的なはたらきです。私が同朋会運動で出遇つた人や、親鸞さまの言葉であります。それが帰る処であり「帰依」するところ、依り処という意味を持ちます。あるいは、左側が世間であれば、反対はお淨土ですか。左側は此岸だつ

たら、右側が彼岸と言えます。

そうしますと、十五年前の「私」は一番上の左側におりますね。もちろん念佛しない時は、今もここにいます。言いたいことは、左側の世界しかなかつたということです。帰るところがないまま、私がこの世界の主人として、裁判官として現実を裁いてきた。これは良いか悪いか、これは間違つてゐるか正しいか。そういうふうに、自分を依り処として生きてきた。未熟ながら自分の経験・知識を根拠としてきた。そして、これから経験と知識をもつと積めば、きちんと公明正大に正確に現実を見ることができるはずだというふうに思つていた。だから勉強し、社会で経験を積んできたわけですし、真宗を学ぶこともそれと同じでした。

しかし、同朋会運動で私が学んだのは、「背いでいる我」です。真宗門徒の生き方とは、淨土真宗を生きるということだと思うんです。



仏本この莊嚴清淨功德を起したまへる所以は、三界を見そな
はすに、これ虚偽の相、これ輪転の相、これ無窮の相にして、
尺蠖屈まり伸ぶる虫なりの循環するがごとく、蚕繭蚕衣
なりの自縛するがごとし。あはれなるかな衆生、この三界に
締結びて解けずられて、顛倒・不淨なり。
(浄土論註)

■親鸞さまの「言葉」に帰れ

同朋会運動の初期において、「親鸞に帰れ」というスローガンがうたわれたといわれます。「我々僧侶は、親鸞と遠く隔たつてしまつた。だから親鸞に帰ろう」というわけです。その時に、「親鸞に帰れ」という意味は、七百五十年前の親鸞さまに帰れということではなくて、親鸞さまの「言葉」に帰れ。

親鸞聖人の「言葉」を依り処として考え抜きなさいということですね。私の知識・経験をもとにして考えるのではない。

私を根拠に物事を見ていくではなくて、仏に出遇つた人の言葉を、まず依り処にして、そこから考えてごらんと。その時にどうなるか。世界の見方が変わるはずです。

今まで自分を依り処に生きている時には、この世界はどのように見えていたかというと、すべて勝ち負けの世界です。競争と損得。それをあえて言えば、戦場だつたんです。私にとつてすべて戦場です。「こいつには負けたくない」とか。あるいは「なんでこ

んなふざけたやつがいるんだ」とか、「邪魔だ。」いつが俺の人生を邪魔しているんだ。「こにいても損するだけだ」と、そういうふうに、この世界が戦場に見えていました。

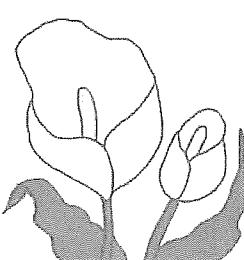
みんな苦しんでいます。それを悲しみ、厭う心を与えられるということが、戦場から道場へということではないでしょうか。それが、背いている我として生きることだと思っています。

これは、『歎異抄』が同朋会運動で大切にされてきたことにつながっています。唯円さんはどうして『歎異抄』を書かれたのかというのは、資料に引用しましたように、

かなしきかなや、さいわいに
念仏しながら、直に報土にう
まれずして、辺地にやどをと
らんこと。

（『真宗聖典』六四一頁）

鸞さんを語りながら、教えに背いて、今日もまた、「あいつなんて必要ないだろう」と裁いている生き方が見えてくる。



これは、せつかく念佛してきたのに、お淨土に生まれることができなかつた、残念だということではないですね。私たちに「かなしきかなや」という生き方を教えてくださつてゐるよう思います。親鸞聖人の直弟子として教えを受けながら、それに背いてしか生きられない。でも、その背いてしか生きられないといえるのは、親鸞聖人の言葉を依り処にして生きているからですね。そこにちゃんと道があるわけなんです。自分の判断で進んでは、どこに自分が立つてゐるかわからぬ。道するべもなくまま生きているようなのですけれども、如來の言葉、親鸞聖人の言葉を根拠とした時に、はじめて、「背いているなあ」ということが道しるべになつていくわけです。背いているという悲しみが生きる道になつていく。それは流転していふとは言わないのではないしょうか。

淨土に生まれることができなかつた、残念だということではないですね。私たちに

■巨大な御影堂

（賀茂河にいれて魚にあたうべし）

同朋会運動がはじまつた背景には、教団自体が大変な危機感をもつたということがあつたそうです。戦時中は、国家の戦争遂行に積極的に協力し、門徒さんをどんどん戦場に送り込んだということもあり、門徒さんの信頼を失つたこともあります。

その後復興が始まると、みんな東京に出ていく中で、地方の過疎化が進み、寺を支

某 それがし 親鸞閉眼せば、賀茂河に
いれて魚にあたうべし

（真宗聖典）六九〇頁）

えていた農村も疲弊する。経済優先の新しい時代の中で苦しむ人々に応えようとする、創価学会とかの新興宗教が出てきて、門徒さんがお仏壇を焼くようなことが起ころ。そういうわけで、大谷派の存在の意義は何なのか。現代の日本社会においてどういふ役割があるのだ。お寺は、いまだに封建的な因習の中に閉じ込められてゐるではないか、と問われ、教団の存在 자체が搖らいだわけです。そういう危機意識の中での大谷派の存在意義を確かめた時に、もう一度

親鸞さんに帰り、親鸞聖人の言葉に帰れと、呼ばれたんでしょう。

では、大谷派の存在は揺らいだが、京都駅の正面に屹立する巨大な東本願寺のお堂とは何なのかを考えてみます。

お堂はますます大きくなつていった。
 「こんなお堂を親鸞さまは求めていない。
 これは親鸞聖人に背いているんだ」と言え
 ます。それでいいと思うんです。背いてい
 るんだけど。しかし背かなければ、未来の衆
 生に、この教えが残せないと考えたのでは
 ないでしようか。そこに、今までの私たち
 の先人、真宗門徒の先輩方のご苦労があ
 ると思つてゐるんです。

批判しようとしたら、いくらでも批判で
 きます。「こんな封建的で、こんな貴族の
 ようにいろいろな色の衣を着ている。これ
 では、墨染の衣で何の財産も持たないま
 生涯を送つていた親鸞聖人に背いているだ
 ろう。ふざけているだろう」といくらで
 も批判できるんです。でも、自分が同朋会
 運動の中で育てられた時に、「だから、私
 は遇えた」と思つています。もし、親鸞聖
 人を賀茂川に流してしまつていたら、教え
 は残らなかつたのではないかと想像します。
 歴史の中に消えていたと思ひます。

生涯仏弟子として生きられた親鸞聖人は、

本当にそう遺言したんだと思いま

す。しかし、弟子たちは川に投げ
 込んだりしないことも、わかつて
 いたのかもしれません。もし遺言
 どおりにしたら、変だなどとも思い

ます。「師の命令は絶対だ」と弟
 子が従つて、遺骨を川に投げ込ん
 でいたら、そちらの方が少し怖い
 なと思います。神さまかカリスマ

みたいに神格化していたことにな
 ります。でも、教えを聞いた人たち
 が、ただ親鸞さんのお墓を作り
 たいのではなく、これを未來の衆
 生、だから私たちです、私たちに
 残したいと願つて御影堂を作り続
 けた。だから、私は御真影に出遇
 えたと思つています。そういう意
 味で、私たちは批判する時、どこ
 を立場にしているのかというこ
 となんです。親鸞の言葉と違う
 と言つて過去を批判しているのか、



ら批判しているのかです。我的こととなれば、自分の責任になります。

「われもひともそらごとをのみもうしまいそうろう」(聖典六四一頁)と『歎異抄』の言葉にあります。誰か他人が嘘、偽りばかりを言いあつてはいるから痛ましいのではなく、批判の対象に「われ」も入つてはいる。そこに同朋会運動の精神があると思つています。

■なぜ常陸国へ行き、京都に戻られたのか

ですから、親鸞聖人がなぜ賀茂川に自分を流せと言つたのかは、親鸞自身も弟子たちも名を残したいという、名利心の問題としても押さえているのかもしれません。そ

う思うのは、親鸞聖人はつねづね「われはこれ賀古のかこきょうしんしゃみの教信沙弥(中略)の定なり」(『真宗聖典』六八〇頁)とおつしやつていだと。つまり、帰る場所となる言葉にしていたというわけですね。

播磨國の賀古郡というところに教信とい

う方がおられた。奈良興福寺の学僧だつたんですが、ある時行方不明となつて、いつしか沙弥となつていた。沙弥とは、出家に

対して在家の生活をする仏法者。「定なり」というのは、模範にすることです。

親鸞聖人は、教信こそ念佛者の生き方の模範だと見なしていたんですね。

だから、親鸞聖人は常陸国(現在の茨城县)に行かれたのだと思います。私は茨城出身ですが、なぜ親鸞聖人は常陸国に来られたのかと、そして、なぜ親鸞聖人は六十歳になつて京都に帰られたのかという疑問がありますが、秘密はここにあるんじやないかと思います。教信沙弥を模範にして

いる。だから、常陸で教信沙弥のごとく生きようとした。御同朋・御同行がたくさんいた。だから、常陸で教信沙弥の権威づけ景は親鸞聖人が読まれた『往生十因』にはありませんが。

その後、どんな生活をしていたかといふと、農村で、奥さんと小さな子どもがおり、今まで雇い労働者。その日その日の糧を得るために、荷物運びや畠仕事、卑しいとされる仕事もしていました。でも、いつも南無阿弥陀仏と念佛をしていて、ボロボロのあばら屋は、西側の壁だけ穴が空いたようになつてしまつた。それで、もう

一度、教信沙弥の生き方に戻るために、京都に戻ったのではないかと。

■賀古の教信沙弥

では、教信沙弥の念佛者の生き方とはどんなものだったのかというと、時代が下るほど権威化していく部分があるんですが、興福寺で学問に精通した僧侶だつた。ところが、大乗佛教の僧侶としての、これが自分の生き様なのかと疑問に思つたのかもしれません。それで、僧衣を脱ぎ、興福寺での官僧の身分を捨ててしまう。こういう背景は親鸞聖人が読まれた『往生十因』にはありませんが。

その後、どんな生活をしていたかといふと、農村で、奥さんと小さな子どもがおり、今まで雇い労働者。その日その日の糧を得るために、荷物運びや畠仕事、卑しいとされる仕事もしていました。でも、いつも南無阿弥陀仏と念佛をしていて、ボロ

ていて、西方淨土を礼拝できるようになつていた。地元の人は、興福寺の立派な僧侶だなんて知らない。貧しい生活をしていても、いつも南無阿弥陀仏と称えて、西の方を礼拝しているので、阿弥陀丸と呼ばれていた。そういう生涯を送り、最後はどうなつたかというと、死んで自分の身体を犬に食わせた。野垂れ死んで犬に食われた。

そういうふうに生きた人が、親鸞聖人が模範にした念佛者なんです。名もなき念佛者。ですから、私でしたら、もう大谷派の職員を辞めたので、同朋会運動も終わりましたという話ではないですよね。生涯、運動というのは続くんですけども、背いている我を教えられながら。「何宗ともなき念佛者」。私は真宗大谷派の僧侶です。だから念佛しているわけではないですね。何宗ともなき念佛者です。市井の中生きる。

親鸞聖人は、そういうことで常陸国に行かれたと思います。念佛者として生活しきでいろんな人に出遇つていったと思うんです。天台宗の人もいれば、日蓮宗も修

験者もいる。親鸞聖人は淨土真宗に改宗せよと言つたわけではない。いろんな宗派やいろんな因習の中で、例えば、現代でいえば、心理学者でもいいですが、キリスト教の方でもいいです。淨土真宗が正しいんだから淨土真宗になりなさいではない。心理学とかよりも、仏教の方が眞実ですか、そういう話ではなくて、あらゆる分野の人があれぞの分野をもつと深く極められるような助言者として、あるいはこの社会を支える黒子として生きてきたのが、真宗門徒であつただろうなと思います。

だから、親鸞さんが賀古の教信沙弥を模範としたように、歴史の中に、名もなき念佛者が、たくさん埋もれている。そういう埋もれた念佛者を掘り起こしてきたのも、同朋会運動だと思います。その一人が、例えれば、明治四十三年に大逆事件の犯人にされ、自死してしまった高木顯明という真宗大谷派の僧侶です。和歌山県新宮の住職でした。事件そのものが冤罪なんですが、幸徳秋水の共犯として、明治天皇暗

■名もなき念佛者を掘り起こす

／高木顯明／

そして私も、そういう何宗ともなき念佛者として、ふだん会計事務所に行つても、そこで私の今まで聞いてきた、自分が教えてもらつてきたことを、仏教用語を使わず自分生き方、考え方として伝えていく。ですから、賀古の教信沙弥、親鸞聖人の生

殺を計画したということで死刑判決を受け、十二人が死刑になつたという事件です。重要なのは、大谷派は高木顕明さんが死刑判決を受けた時に、助けようとしたのでなく、僧籍剥奪にして教団を守ろうとしたことです。

■名もなき念佛者を掘り起こす

／ 小笠原 登（おがさわら のぼる）／

また、小笠原登という尾張のお寺に生まれた僧侶がいます。名古屋では恵方巻で有名な甚目寺観音のすぐ近くです。むかし甚目寺には、聖徳太子を祀るお堂もあつたんです。ですから、親鸞聖人が常陸国から京都へ帰る時に、たぶん聖徳太子を礼拝するために立ち寄つた時に、お弟子になつたのが円周さん。その円周さんが太子堂を由来として開いたお寺が円周寺で、そこが小笠原登さんの生まれなんです。

その甚目寺というのは、一遍上人の絵巻に、当時のハンセン病者や被差別民の人た

ちが、そこで施しを受けているという場面が描かれています。それで実に不思議なことに、円周寺の副住職であり、医者であつた、その小笠原さんがハンセン病の隔離政策に反対した。ハンセン病の隔離政策は戦後もずっと続いていたんですが、私は何も知らずに育ちました。隔離政策という恐ろしい人権侵害が法律によつて行われながら、私はずっと知らずにいました。関心がなかつたんでしょう。

ですから、もしかすると、みなさんの周りでも、あの方急に亡くなられたとか、遠くに引っ越したという話でも、ハンセン病にかかる療養所に入れられた人がいたかもしれません。「あの家の者はらい病患者だ」となれば、一族ごと徹底的に差別され排除されますから、隠すために、病気で死んだように偽つて、泣く泣く家族を療養所に送つたということが、つい最近まであつた。

しかし、「だから教団はダメなんだ」ではなくて、教えというものは、どんな時代においても、流され歪められていくものである。だからこそ、私たちは何を依り処として、それを批判していけるのか。親鸞聖人の言葉に帰らなければ、自分たちも社会の中で孤立を恐れて、いつの間にか国の政策や、経済の効率化に隸属してしまう。順

ところが、小笠原登さんは科学的知見をもつて隔離に絶対反対したにもかかわらず、

学会の中でも孤立し、たつた一人で奮闘してきた。それを大谷派は応援したかというと、まったく逆です。大谷派教団は療養所に慰問布教に行つて、「あなたたちは宿業なんだから、仕方ないんだ。あなたたちがここに隔離されているのがお国のためなんですよ」というふうに、隔離と差別に対しても隸属させるような布教をしていましたですね。高木さんも小笠原さんも、大谷派に属しながら大谷派に顧みられることなく、孤独に生きた、名もなき念佛者の象徴でもあります。

ところが、小笠原登さんは科学的知見をもつて隔離に絶対反対したにもかかわらず、

■本願寺は日本の縮図

ハンセン病は優生政策ですね。「国の役に立たないものは隔離して、消滅した方がいい」という国策ですから、それを私たちには社会常識に流されずに、「それは差別だ、排除だ」と見抜けのかと。そういうこと

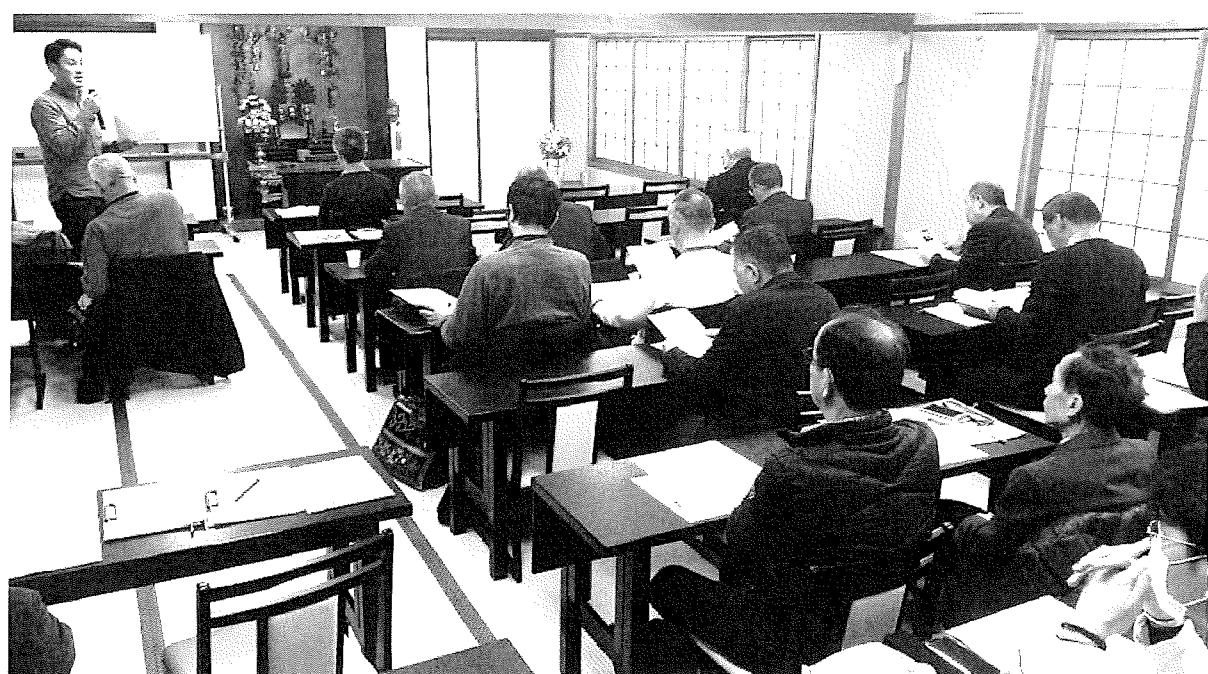
を、小笠原登さんを知った時に、自分はどうであろうか、現代の差別を見抜けているだろうかと考えました。

また、高木顯明たちが日露戦争に反対したから、検察がわざわざ事件をでっち上げてまで処刑してしまう。そういうことを教団が見抜けないで、逆にその人たちを見捨てたというところを、もう一度確かめて、現代にも同じようなことが起こっていないかと批判していく。そういう運動なんだというふうに思います。

私は、こういう過去の歴史を、少しながら学べば学ぶほど、大谷派というのは日本縮図だなと思うんです。大谷派というより、もっと長い歴史で考えると本願寺。本

願寺というのは日本の縮図。ここに、日本の問題も課題も良いところも希望も詰まっている。国だけを見ていると、大きすぎてつかめないけれども、本願寺をみると、日本の歴史と日本の問題が凝縮してみることがであります。

お寺のあり方もそうです。江戸時代の制度のまま、近代以前のものが残っている。だから、お寺に住む家族というのはすごく苦しんでいると思います。それに教団も圧倒的な格差社会ですし、中央集権的な階級制度ですね。そういうこともやはり日本の問題があらわれていると思います。ところが、そんな問題を抱えながらも本願寺があることによって、たくさんの念佛者が生まれ、その念佛者によつて日本社会が支えられている。私たちがよく知つているような歴史上の人たちでも、いろんな分野に真宗門徒がいるものだと驚きます。



高岡教区教化テーマ にんげん 念仏者、悩みおおきに迷いなし

■両極の思想で歴史を動かす真宗

その時に大事なことは、両方の立場が生まれていることです。これがおもしろい。先ほどの高木顯明さんのように日露戦争に反対し、明治政府の富国強兵政策に対して、それは親鸞に背くと考えて行動した人と、逆にその政策を推進する人、両極に立つ人を生みだしているのが本願寺なんですね。例えば、福澤諭吉さんです。近代日本の立役者ですけれども、無宗教、無神論者の権化のように言われています。ところが福澤諭吉のお母さんは久留米の門徒です。あえていうと妙好人です。真宗の信仰地帯から生まれたのが福澤諭吉だということは、本願寺が日本の縮図というのを、要するに、両側の人を生みだして歴史を動かす。戦争に本当に反対して、無期懲役で自死にまで追い込まれるような人も生み出せば、逆に、歐米列強に植民地化されないように富国強兵を推進するような人も生みだす。あるいは、ハンセン病の

隔離に反対する人と推進する人を生みだす。大事なのは、どちらも真宗を学んでいるとということです。

どうしてなのかと考えると、歴史を貫く浄土真宗の教えは、ある時代ある社会の中で熟したときに、ラディカルに動き出すのでしょうか。一方は、親鸞聖人の教えに順じているつもりが、正義の旗印にしてしまう

人と、もう一方は、親鸞さんに背いていると嘆きながら生きる人と。ですから、先ほど話しました靈的な感受性が賦活された時に、すごい思想的エネルギーを生み出せんだろうなと思うんです。

たとえば南条文雄^(なんじょうぶんゆう)という方は、明治から戦中にかけてのインド仏教学の大学者で、大谷大学の前身の真宗大学の二代目の学長までされました。ところが、日露戦争中の講演会では「死ねば極楽、やつつけろ」で、『にんげん 念仏者、悩みおおきに迷いなし』

縮図だと。歴史を動かす両方の力に関わる人を生み出しているんです。親鸞さんの教えから生まれてきてしまっている。だから、安易に善悪を批判できないのです。その歴史が私たちの鏡になることが、歎異の精神で生きるということなんだろうと思つてします。

■仏教は、民族宗教からの解放運動

次の問題として、先ほど靈的感受性といた時の靈的というのは、オカルトの意味ではないと言つたんですけども、私は、日本というのはオカルト国家であり、西歐的な近代国家ではない、だからこそ、浄土真宗の教えがあるんだと思つています。つまり浄土真宗は仏教であり、仏教とは民族宗教からの解放運動であるという視点です。仏教というのは民族宗教からの解放運動だからこそ、世界で通用するものがあるんです。国には複数の民族があるでしょうから、民族同士で争いが起ころ。一つの民族を結

束させる世界観に閉じ込められ、その内と外に排除や差別される人たちが生み出されます。聖徳太子の時代に外来思想の仏教が伝来して、とうとう鎌倉時代になつて浄土真宗として展開したということは、民族の血肉となつた、それは民族として懺悔したということではないでしょうか。つまり大和民族の民族宗教から解放する思想になつたのではないかと思つています。

前にもお話ししましたが、お釈迦さまがそうですね。お釈迦さまの教えは、インド民族宗教からの解放運動です。どういう民族宗教かといえば、いまだに残つているカーストの階級社会です。身分違いでの結婚もできない。そういう圧倒的な制度の中に不可触民といわれる人たちもいる。その根拠は靈魂ですね。靈魂が残つて輪廻していくから、生まれながらに人間の優劣は決まつているという宇宙観。

ところが、そのような輪廻する靈魂、我がないと言つたのがお釈迦さまでしょう。「諸法無我」。輪廻する本体がないと言

われて、「あ、なんだ」と目が覚めた。この世に奴隸として生まれたのは、過去世の行いが悪かつたから仕方ないと思つて甘んじていた。ところが、そんな靈魂なんてないと教えられて、奴隸の自分もバラモンの聖人も同じ人間なんだということに目覚めたんでしょう。この世は神々の造つた世界ではなく、特權階級の者が創作した制度であると。

ですから、私たちが世界をどう見ているかということの土台になるのは宗教觀なんですね。それでは、日本はどうかといえば、大和民族の宗教觀です。この宗教は、天照大神を頂点とする神々であり、その天照大神から続いている、その血筋の皇室・天皇のもとで、私たちはその臣民として、この国に住むことを許されているというか、育まれているというわけです。その神々の血統の根拠は天皇靈です。個々人の天皇は天皇靈をずっと引き継いで、神の国土の安寧と五穀豊穣を祈りまつりごとを行う。その世界觀が日本人としての共同感覚であ

り、私たちの先祖崇拜にもつながっているわけですね。

■『御伝鈔』

／親鸞聖人は神の末裔／

それでは、真宗は、どこでそのことを問題として教えてくださつてゐるのか。資料（十一頁）に引用しました『本願寺聖人伝繪』ですが、報恩講にお参りすると、『御伝鈔』の挿読がありますね。私はいつも眠くなりながら聞いていました。なぜかと云ふと、『本願寺聖人伝繪』は親鸞聖人の曾孫の覺如上人が、親鸞さんを権威づけ、神格化するために脚色していると教えられてきたものですから、そういう儀式における挿読を批判的に思つていていたわけです。

たしかに本願寺の聖人として確立するためであることは、そのとおりなんでしょうけれども、歴史のおもしろさは、覺如さんにそういう意図があつたとしても、時代が変わると、その意図を超えてしまうことだ

しょうね。つまり戦前の現人神あらひとがみと戦後民主主義を経験した、現代の私たちがどう受け止められるかなんです。

先ほど話しましたように、「どこを依り処として、批判をしているんだ」ということを曖昧にしたまま、『御伝鈔』は親鸞聖人の権威づけ、と決めつけていては、報恩講での拝讀が聞法にならないなど、自分自身の固執に気づいたわけです。それで、先人の念佛者たちが、私たち未来の衆生に、真宗の教えを伝えたいという願いから、この御伝鈔拝讀が続けられてきたんだと考え直したら、どう読めるかを問題提起したいと思います。

それ、聖人の俗姓は藤原氏ふじわらうじ、
天児屋根尊あまつこやねのみこと二十一世の苗裔ひょうえい

(『真宗聖典』七二四頁)

とはじめります。親鸞聖人は藤原氏の血筋ですね。日野家という藤原一族です。とい

うこととは、親鸞聖人のご先祖は天児屋根尊あまつこやねのみことなんです。神さまです。そういうふうにはじまっているんです。親鸞聖人も覚如上人も藤原一族は、天照大神に仕える天児屋根尊あまつこやねのみことという神々の末裔ですと。何が言いたいかというと、親鸞聖人は、そういう日本の大和民族の神々を祀る氏子から、念佛者になつた。民族宗教の世界観から解放されていく物語として、『御伝鈔』を読めないかななど思います。

■慈円は民俗宗教化した仏教の象徴

そうしますと、私たちが真宗門徒として、資料(十一頁)の図の右側に親鸞さんといふものを振りどころとして置いた時に、その親鸞さんと対照的に、左側に誰が現れてくるかというと、慈円だいそうじょう大僧正です。『御伝鈔』でも、親鸞聖人の得度の師匠として、慈円さんが登場します。場面説明としては、「親鸞さんは九歳の時に、門跡の青蓮院で、もんせき しょうれんいん攝政関白九条兼実くじょうかねざねの弟で、天台座主てんたいざすを四

度もつとめた慈円を師として、得度し出家された」ということですね。

しかし、親鸞聖人が、仏道の入り口で慈円さんを師匠としたということで、本当は…。

本当は、ということですが、何を伝えようとしているのか。天皇という天照大神の子孫を支える神である天児屋根尊、その子孫である親鸞聖人と、同じ藤原一族の慈円さん。その神々の天皇国家を支えていくのがあつたわけです。要するに、加持祈祷による鎮護國家。天皇家を呪術的な仏教で守っていくという、その役割を背負つて比叡山に入つていくわけです。わかりやすくいふと、仏教の総本山に入ったと思ったたら、日本民俗宗教の守護者になつたというわけです。親鸞聖人が、そういう比叡山で、どのようにして本当の仏教に出遇つていくのかという、解放の物語と読めないでしようか。最後に付け加えますと、普段私たちが、テレビで天皇陛下を拝見する時は、公務な

のでスーツにネクタイ姿なので勘違いしてしまっているんですが、天皇陛下の宮中でのお仕事は祭祀ですね。そうやつていつもお祓いをして、日本の国家が安泰であることを祈つてくださつてするのが天皇陛下です。そして江戸時代までは仏教徒でもありました。しかし、明治政府が、皇室から仏壇と位牌を取り上げて泉涌寺に預けてしまい、信教の自由を奪い、京都から江戸城に幽閉した。平田篤胤派の神道、新しい神道というふうなものの祭祠者にされてしまつたです。

■親鸞と慈円とに象徴される

矛盾に立ち続ける

ですから、大谷派は天皇に否定的なようと思われていますし、皇室を廃止することが民主主義だという考え方の人もいますけど、私は、天皇をふたたび現人神にせずに、現憲法における象徴天皇のあり方を守つていくのが、現代における大谷派の役割だと

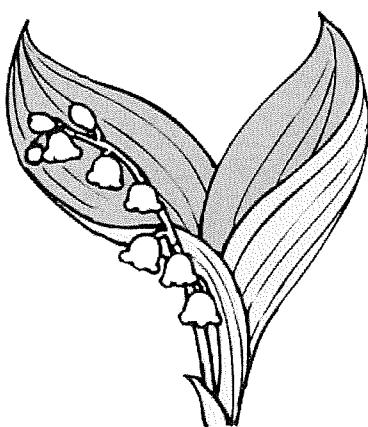
思っています。それは私たち大谷派も、法主を生き仏としてきた歴史があるからこそ、学んでいけることがあります。

私たち今は今も、図の左側の、祭祠といいう呪術的国家に生きている。神道は穢れの観念があるから、差別が生まれてくるんです。ですから、いつでも私たちは、親鸞聖人と慈円さんに象徴される矛盾に立ち続け、日本民族宗教化した仏教にいるのが、私たちなんだということを忘れない。それが『御伝鈔』からお話ししたかったことです。ちなみに、資料（十一頁）に『愚管抄』を引用していますが、慈円さんが書かれた歴史書です。

最後に確かめますと、民俗宗教と真宗とを並べて、どちらが正しいかを選ぶのではありません。それでは主義主張です。真宗とは、さまざまな思想の底に流れる仏の願いをすくい取つて、

其 ^それ _{さんぼう} 三宝に帰りまつらはずは、
主 ^すを生き仏としてきた歴史があるからこそ、
何をもつてか枉 ^{まが} れるを直さん
（『真宗聖典』九六二頁）
と、十七条憲法にありますように、曲がつてしまっているものを直す教えです。それが同盟会運動でしよう。

（了）



ほとけの子リーフレット第1弾

しょうとくたいし 『聖徳太子』

どうしてお寺の本堂に
聖徳太子のお軸が
かけられているの？

なぜ親鸞聖人は
尊敬されたの？

なにをした人？

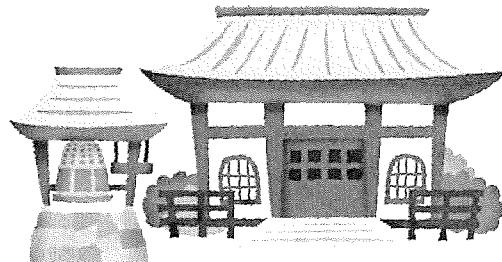


日常の法務や子ども会の場でご活用ください

本山青少幼年センターでは、慶讃事業のひとつとして「ほとけの子リーフレット」の制作を進めています。第1弾は「聖徳太子」。2021年は聖徳太子の千四百回忌にあたります。日本仏教において宗派を問わず尊ばれ、親鸞聖人は「和國の教主」と仰がれました。時代とともにイメージは変わりながらも、真宗門徒の中で、なぜ尊敬され、大切に受け継がれてきたのでしょうか。親鸞聖人にとって聖徳太子はどのような方だったのか、1枚のリーフレットにまとめました。(A6サイズ・無償)

■お問合せ先■

しんらん交流館(青少幼年センター) TEL:075-371-3440(平日9時~17時)



【タイトル『我身』について】

「わが身」といいますね、あの「わが身」というものを正しく「わが身」といえるのはですね、やはりこの阿頼耶識ですね。阿頼耶識といふ阿頼耶識というものは、このですね体ですね、この身とというもの——この身とものをですね、それをちゃんと見ていくものですね、公明正大な心をもつてわが身といふものを見していくんですよ。わが身を見ていくと。わが身というのは、つまり阿頼

編集委員募集

ただ今、編集委員を募集しております。
協力していただける方は教務所(担当菊池)までご連絡ください。

編集委員

黒川一紀(第3組隨順寺)
今井信悟(第3組正立寺)
北條康恵(第4組光證寺)
梨谷真嗣(第6組真行寺)

編集後記

テープ起こしは、私にとつて苦行です。とはいへ、お話を少しづつ聞きながら文章に起こしていくので、たださらっと本を読む事に比べると、より深く理解できているように、少し賢くなつたようになります。

ところが、それで私自身が変わったか、少しでもよりよいものになつたかというと、全くそのようなことはありません。以前のようすぐ怠けだして、周りから催促されてやつと動き出す毎日です。

そうして悶々とした日々を送りながらも、なんとか続けていられるのは、有り難いな、と思える瞬間があるからです。第四号までの瓜生先生も第五号からの木名瀬先生も、ご自身の苦悩を赤裸々に語つておられます。私だけではない、先生方もそれぞれ苦悩を抱えておられる。誰もが苦悩を抱えた凡夫なのだ、皆独りだけれど独りではない。そう感じることで少し勇気をいただきながら、一歩一歩歩んでいます。

(今井信悟)

発行者

真宗大谷派高岡教区教化委員会

発行所

真宗大谷派 高岡教務所

〒933-0912 高岡市丸の内2-15

TEL 0766-22-0464

FAX 0766-24-2215

E-mail

takaoka@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派(東本願寺)

高岡教区ブログ



<https://takaokakakyoku.net>